

海外移住資料館を訪ねて

外国語学部 ス페인語学科3・4年

丸屋 凜奈、新垣 玲奈、西尾 心優、原田 デイファ

2024年12月6日、私たち新木ゼミの3・4年生は桜木町駅・みなとみらい駅から徒歩15分の、JICA横浜2階にある「海外移住資料館」に行きました。その資料館で、私たちは海外移住に関する歴史的な資料を見ながら、日本人の海外移住について学んできました。



アリアンサ移住地

丸屋 凜奈

私はアリアンサ移住地のブースをメインに見てきました。その理由は、2023年海外移住資

料館に足を運んだ際に、展示されていたアリアンサ移住地の写真を実際に自分の目で見たことで、興味を持ち始めたからです。

「アリアンサ移住地」…1910年代に入ると、日本人移民は、ブラジルにおいてコーヒー農園の労働者から自分の農園を持つようになりました。独立することを目指した移民は、日本人のみの「移住地」を作り始めました。アリアンサ移住地は、その代表的な移住地のひとつです。その移住



この写真は、移住が1925年から開始されたブラジルのサンパウロ州西部のアリアンサ移住地の展示物の写真です。

地では、「コーヒーをつくるより人をつくれ」という高い理想が掲げられていました。森林を切り拓き、農業を営み、定住に向けての努力が続けられていました。

アリアンサ移住地の展示物を通じて、日本からブラジルへ移住した移民の方々が言葉の違う慣れない土地で、想像を絶するご苦労をされたということがわかり、彼らの忍耐強さに心から敬服しました。

第3ブース…日系人・日系社会の変遷をたどる／日系人・日系社会の現在 新垣 玲奈

資料館の第3ブースでは、ブラジルを中心に、日系人や日系社会の変遷について解説がされていました。私の両親もポルビアで生まれ育った日系人であるため、特に興味深く感じました。展示の中で解説されていた「日系人」と「Nikkei」の定義の違いについては、今まであまり意識していなかったため、とても良い勉強になりました。

「Nikkei」という表記は2000年代に生まれたもので、日系移民だけではなく、その子孫や非日系の配偶者も含む、より広範で多様化したコミュニ

ニテイを表現した用語だそうです。

また、1980年代から始まった「デカセギ」についても触れられており、横浜市鶴見区に多くの日系人が移り住むようになった経緯が解説されています。さらに、鶴見区で日系人や外国人を支援するブラジル系日系人・安富祖美智江氏へのインタビュー映像の展示もあり、横浜市における多文化共生社会について理解を深める良い機会になりました。

ハワイの移民

西尾 心優

皆さんはハワイと聞いて何を思い浮かべますか？私にとってハワイは「観光地」という印象はありませんでした。しかし、海外移住資料館を訪れた際、ハワイには多くの日本人移民がいたことを知りました。日本人移民は、1868年に153名がサイオト号で移住したのが始まりで、彼らは「元年者」と呼ばれており、サトウキビ農園で契約労働に従事しました。また、日系兵士に関しても知ることができました。彼らは第442連隊に志願し、偏見や差別に耐えながら戦争に尽力し、戦後は日系人の地位向上や日米関係改善に貢献しました。特に、戦時中には日本語を活かして投降を呼びかけ、多くの命を救いました。さらに、社会的な差別を受けた日系移民や子孫のために、1954年にはエルトン・サカモトとサカエ・タカハシによって「セントラル・パシフィック・バンク」が設立されました。今回、その資料館を訪れたことで、ハワイや移民の印象が大きく

変わり、展示物を通じて貴重な学びを得ることができました。



「ハワイ移民」に関する展示物です。



ここでは、ホレホレ節という歌を聴くことができます。この歌の題名にある「ホレホレ」は、サトウキビの枯れ葉を手でかき落としていく作業のことを表しています。

写真花嫁

原田 デイファ

2024年12月6日、JICA横浜の2階にある「海外資料館」にゼミの調べ学習として行ききました。私はそこで「写真花嫁」について知り、興味を持ちました。「写真花嫁」というのは、一度も直接会わずに、移住先の男性との写真によるお見合いと文通だけで結婚すると決め、夫の住む国に行く女性のことをいいます。この「写真花嫁」は先に海外へ移住していた男性の花嫁不足により、数多くの女性がアメリカやハワイに渡航したと言われていました。アメリカ本土では約1万人、ハワイには約2万人の日本女性が花嫁として渡りました。「写真花嫁」の渡航後は、夫と一緒に農業を始め、家での家事労働も仕事としていました。このように「写真花嫁」は日系人家庭やコミュニティの形成などにも大きく貢献してきました。



この写真は、実際に使われていたお見合いの写真です。